
透析室看護師のフットケア技術向上に向けた取り組み

榎 陽平、細谷芽衣、関 純子、小野 望、鈴木由美子、
上野睦子、松岡純子、近江 薫、宮形 滋*
社会医療法人明和会中通総合病院血液浄化療法部、同 泌尿器科*

The Approach for Improving Foot Care Skill in Our Hospital's Nurse

Yohei Enoki, Mei Hosoya, Junko Seki, Nozomi Ono, Yumiko Suzuki,
Mutsuko Ueno, Junko Matsuoka, Kaoru Oumi, Sigeru Miyagata*
Blood Purification Therapy Part, Urology Department, Internal Medicine*,
Nakadori General Hospital

<緒言>

近年当院透析患者は、高齢化やADLの低下、長期透析による合併症などによりセルフケア能力の低下した患者が増加しており、フットケアの重要性が増している。神経障害と末梢血管障害が足病変の危険因子であるため「リスク分類」で危険リスクの把握をし、「フットチェック表」を用いて足の観察を行っている。また、フットチェック時に指導、爪切り、創処置も行っている。しかし、看護師間の知識・技術が統一しておらず、ケアや観察点に差が見られた。そこでフットケアチームを中心に研修会等に参加し、フットケア技術を学び、伝達講習をした。これらの取り組みがスタッフの知識・技術の向上につながったか、アンケート調査を行ったので報告する。

<対象>

当透析室看護師12名 透析室の経験年数 平均値 5.8年 中央値 3.5年

<期間>

平成24年4月～10月

<方法>

- (1) 糖尿病重症化予防（フットケア）研修会やフットケアに関するセミナーへ参加した看護師がフットケアに関する学習会を開催した。また、実際に爪切り、爪やすり等の技術の伝達講習の実施やリスク分類検査（振動覚検査、タッチテスト、足背動脈触知、後脛骨動脈触知）についての伝達講習を行った。
- (2) (1)の後、看護師への質問紙を独自に作成し、アンケート調査を実施した。質問項目は、各質問について「分からない」から「分かるようになった」までの5段階に分けた。調査結果より改善点を見つけ、今後の課題を明らかにする。

＜結果＞

1. 糖尿病重症化予防（フットケア）研修会やフットケアに関するセミナーへ参加した看護師がそれぞれ資料を作成し、爪の構造や足、爪の役割、正しい爪切り方法ややすりのかけ方、皮膚の状態に関するトラブルについての学習会を開催した（写真1）。当日参加できなかった看護師には、後日資料を配布し全員が知識を共有できるようにした。また、糖尿病重症化予防（フットケア）研修会に参加した看護師から看護師の足モデルを用いて爪切りや爪やすり、爪ゾンデの使用方法について実技指導を行った。リスク分類の各検査（振動覚検査、タッチテスト、足背動脈触知、後脛骨動脈触知）について、患者へ施行する前に、資料に基づいて、看護師の足モデルを活用し、手技の確認を行い、2人ペアで実施した。



写真1 伝達講習

2. アンケート調査より、爪の状態（巻き爪、陥入爪、深爪、爪肥厚）に関して、全体的に以前より分かるようになっていた（図1）。皮膚の状態（乾燥、亀裂、魚の目、胼胝、潰瘍、水泡）に関して、全体的に以前より分かるようになっていた（図2）。リスク分類（振動覚検査、タッチテスト、足背動脈触知、後脛骨動脈触知）に関して、全体的に分かるようになっていた（図3）。フットケア（爪切り、爪やすり、爪ゾンデ、足の処置）に関して、ほぼ分かるようになっていたが、爪ゾンデの使用方法に関して自信がないと回答した看護師が4名いた（図4）。患者指導（足の保湿、爪切りの方法、靴選び、創処置方法）に関して、ほぼ分かるようになっていたが、靴選びの指導に関して自信がないと回答した看護師が2名いた（図5）。

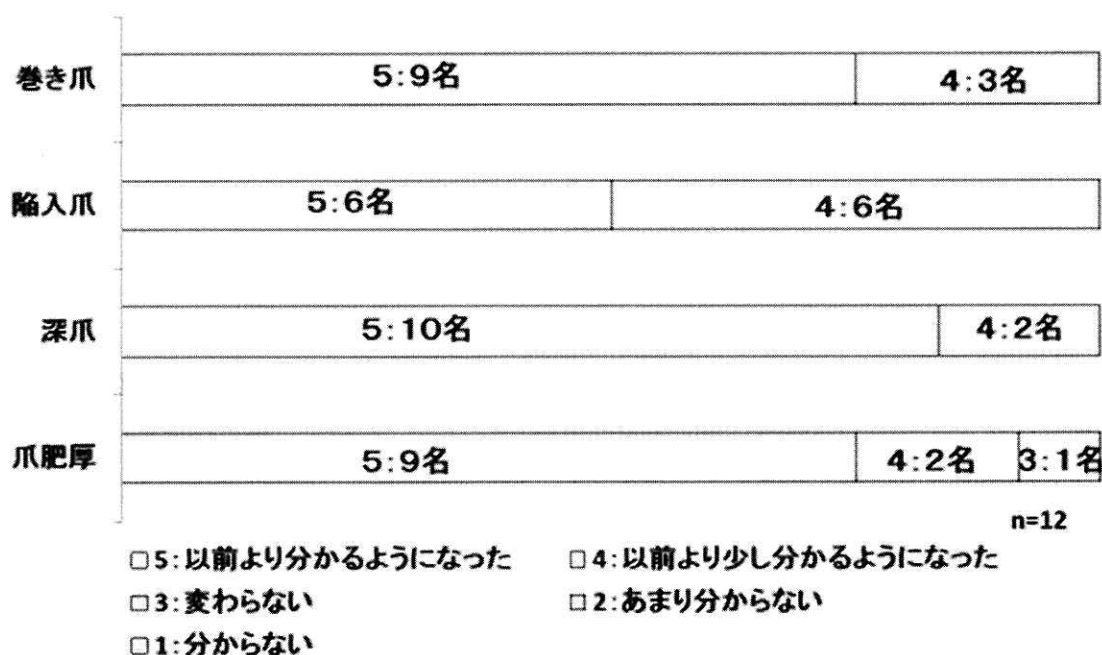


図1 爪の状態について

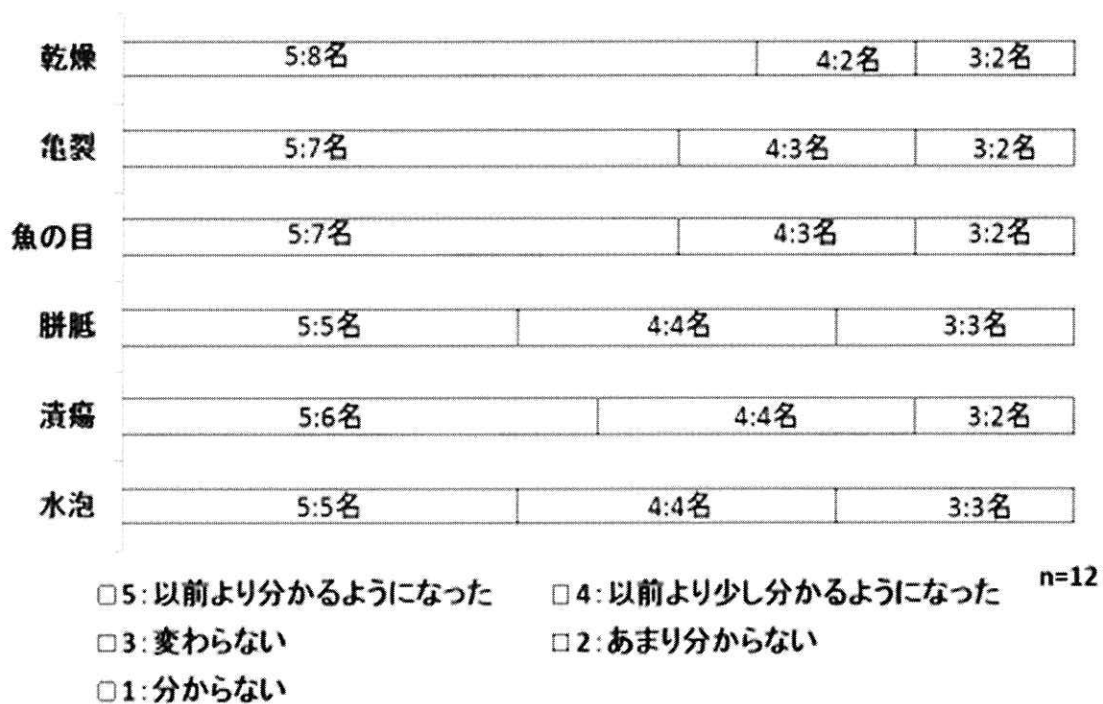


図2 皮膚の状態について

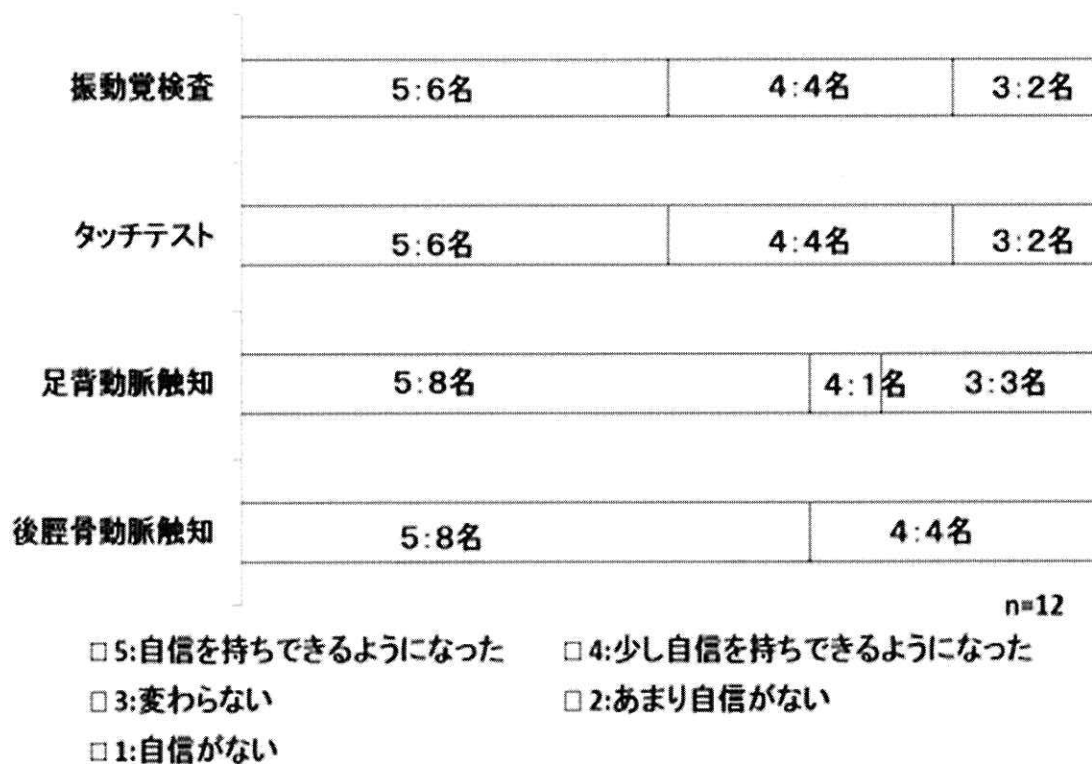


図3 リスク分類について

爪切り	5:2名	4:8名			3:2名
爪やすり	5:3名	4:7名			3:2名
爪ゾンデ	5:3名	4:4名	3:1名	2:3名	1:1名
足の処置	5:3名	4:4名		3:4名	

n=12

5: 自信を持ちできるようになった 4: 少し自信を持ちできるようになった
 3: 変わらない 2: あまり自信がない
 1: 自信がない

図4 フットケアについて

足の保湿	5:9名			4:2名	3:1名
爪切りの方法	5:3名	4:6名		3:3名	
靴選び	5:2名	4:3名	3:4名	2:2名	
靴処置方法	5:4名	4:4名		3:4名	

n=12

5: 自信を持ちできるようになった 4: 少し自信を持ちできるようになった
 3: 変わらない 2: あまり自信がない
 1: 自信がない

図5 患者指導について

<考察>

爪の状態や皮膚の状態に関しては、巻き爪や深爪などについて、ほぼ全員が以前よりも分かるようになっていた。現在フットチェックは、日中透析患者は月1回、夜間透析患者は3ヶ月に1回実施している。足に創がある患者では、透析日ごとの観察・処置、足切断の既往がある患者は、週1回のフットチェックをしている。そのため爪や皮膚の状態を観察する機会が多いため、「分かるようになった」との回答につながったと考える。

リスク分類検査は、実際に患者に施行する前に振動覚検査やタッチテスト等の手技を確認した。患者へ施行する際はペアで行った。これらのことより、互いの技術を確認しあえたことで、「以前よりも自信を持ちできるようになった」と考える。

フットケアについて現在は、定期的に爪切りを施行する患者を決定して、爪切りや爪やすりを行っている。以前よりも視力障害やセルフケア能力の低下により透析室で施行する爪切りの回数が増加しており、看護師のフットケア技術の向上につながっていると考える。爪ゾンデの使用方法について「自信がない」と回答が多かった理由として、「あまり行う機会がない」、「行ったことがない」とのことだった。爪ゾンデは、爪をどこまで切つてよいかや爪床や爪棘の除去に有効であるため、使用方法や意義についての再認識が必要であると考え。また、今後は胼胝削りの方法の検討や爪切り時は適切な道具の選択をして、フットケアに取り組んでいく必要があると考える。

フットチェック時の患者指導では、足の保湿や爪切りの仕方、創処置方法について「自信を持ち指導できている」という看護師が多かった。理由として保湿に関しては、乾燥傾向にある患者が多いために保湿を促すことが多かったことが考えられる。創処置方法では、足病変があり皮膚科や整形外科に通院している患者に対し、その科の医師と連携した継続処置を施行できている。靴選びの患者指導について「自信がない」と回答した看護師が2名いたのは、学習会で取り扱うことが少なかったためと考えられるため、今後の課題であり、靴選びとともに靴の履き方の指導も並行して行っていく必要があると考える。フットケアチームでは、1年に4回足に関するポスターを作成し、患者待合室に掲示している。患者指導で足りない部分や患者に足について興味をもってもらうために継続して取り組む必要があると考える。

足病変は壊疽や切断に至る場合もあり、生命がおびやかされる危険があると同時に足切断によりQOLの低下につながる可能性がある¹⁾。当透析室でも平成12年から足切断症例をきっかけに異常の早期発見、予防的ケアにより重症化を防ぐためにフットケアに取り組んできた。観察、患者指導、処置を継続してきたため、切断に至るケースは減少している。しかし、今後は高齢化や長期透析患者が増加することを考えると足病変のリスクが高まることが考えられるので、よりよいフットケアを施行できるように取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) 日本糖尿病教育・看護学会：糖尿病看護フットケア技術、1-3、2005